

Yūsaku Suzuki (鈴木優作)<sup>1</sup>  
ORCID: 0000-0001-6850-0181

帝国主義下のマッドサイエンス——蘭郁二郎「宇宙爆撃」試論——  
**Mad-Science under Imperialism: Ran Ikujiro's "Space Bombing"**  
DOI: <https://doi.org/10.14746/sijp.2023.69.2>

## ABSTRACT

This paper discusses the critiques of the imperial world image in Ikujiro Ran's unpublished work *Space Bombing*. In this work, the researcher Murao, who works at the Borneo branch of the Institute of Magnetism, studies a "microscopic world" in which microscopic humans live in an atomic structure. He falls into the delusion that there are a minimal world within the atomic structure and a larger world where Earth is considered as a single atom. This paper argues that Murao's perception was based on the scientific knowledge of the scientist Hantarō Nagaoka. The cosmology reflects the wartime image of the world, and we argue that the larger world implies the Western world, the human world implies Japan, and the minimal world implies the colonial world. Moreover, we suggest that Murao's mad science indicates that the imperial world's configuration is not an absolute domination vs. no-domination relationship, but merely a relative relationship, and that the clashes between civilizations are able to be interpreted as insane.

**KEYWORDS:** Sci-fi, mad-science, imperialism, Pacific War

## はじめに

探偵小説界の領袖江戸川乱歩は、第二次近衛内閣の体制下に大政翼賛会結成を経た一九四〇年における文学状況を次のように記録している。

文学はひたすら忠君愛国、正義人道の宣伝機関たるべく、遊戯の分子は全く排除せらるるに至り、世の読み物すべて新体制一色、ほとんど面白味を失うに至る。探偵小説は犯罪を取扱う遊戯小説なるため、最も旧体制なれば、防諜のためのスパイ小説のほかは諸雑誌よりその影をひそめ、探偵作家はそれぞれ得意とするところに従い、別の小説分野、例えば科学小説、戦争小説、スパイ小説、冒険小説

---

<sup>1</sup> 鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター特任助教、日本近現代文学専攻。Contact: [y.w.suzu@gmail.com](mailto:y.w.suzu@gmail.com).

などに転ずるものが大部分であった（新保、山前 2003-2006/29 : 42）。

探偵小説は「犯罪を取扱う遊戯小説」として自肅を余儀なくされ、謎とその解明という元来の形式性を残した様々なサブジャンルへと転進していった。続けて乱歩は次のように述べる。

中にも海野十三君が最も出色であった。彼は「新青年」に日米未来戦という風の科学戦争小説を書いて大いに世評を博し、又、少年科学小説で甚だふるった。私の少年ものは影をひそめ、探偵作家の少年ものでは海野君が最も歓迎せられ、それについて蘭郁二郎君の少年ものがよく読まれた（同）。

中でも軍事科学を扱いとりわけ時代に適応したのが科学小説だったのだ。乱歩が言及したように、この一翼を担ったのが蘭郁二郎（一九一三～四四）である。蘭は東京高等工学校電気工学科を卒業し日本電気に勤務したという理系畑の経歴を持つ。「足の裏」（一九三五）や「夢鬼」（一九三六）など彼の初期作品は乱歩の影響が強く怪奇幻想性が濃厚であったが、地底の高度な文明国を巡る日本とR国との科学戦を描いた長篇「地底大陸」（一九三八）が成功を収めてから、蘭は流行科学小説作家として一躍名を挙げる。蘭の科学小説について権田萬治（権田 1975 : 256-257）は、「兵器の開発中心」で「時折とってつけたように軍事スパイが現われたり、滅私奉公の皇軍の思想が説かれたりする」ことから「苛酷な軍国主義的な社会状況の中で、かなりの偏向を強いられたともまた否定できないように思われる」と評し「文明批評の欠如」を指摘している。だが一方で、海野十三「空襲葬送曲」（一九三二）が増刷禁止となった事などから長山靖生（2018 : 174）は「探偵小説の禁止や総動員体制促進が、直ちに軍事冒険小説の隆盛につながったわけではない」と言う。蘭の科学小説も、必ずしも時局に迎合した作品ばかりではない。横井司（2013 : 356）は、蘭の生前未発表作「宇宙爆撃」および「同じアイデアを扱った別ヴァージョン」である「電子の中の男」（『学生と錬成』一九四二・一〇～四三・二）の存在が権田の「文明批評の欠如」という指摘に対する「反証となるのではないだろうか」と述べている。「宇宙爆撃」の結末には次のような、原子エネルギーの利用への警鐘が示されている。

原子破壊によって生ずる莫大なエネルギーなどというものが、一般人に誰でも利用出来るほど科学が進み、そして通俗化したならば、我々の文化は、飛躍的な大進歩を見るであろうと楽しく思っていた。しかしそれがもし一狂人の手に弄ばれるようになったならば、この地球は、いつ、幾億の人類とともに、モッ葉微塵に粉砕されるか知れないのだ（蘭郁二郎：282）<sup>2</sup>。

同作は「電子の中の男」と異なり未発表であるからこそ、このような明瞭なメッセージが記述されているのだろう。

本稿はこの「宇宙爆撃」を対象に、原子エネルギーのような科学文明への懐疑という意味での批評性のみならず、太平洋戦争という時代背景への批評性について考察する。まず作中で磁気学研究所ボルネオ支所に所属する科学者・村尾の妄想の科学的背景に触れ、次に原子構造における「極小世界」と「極大世界」といった世界観に着目し、さらに本作に帝国主義的世界観への批評が伏在することを論じたい。

## 1. 村尾のマッドサイエンスと長岡半太郎

「宇宙爆撃」の梗概は以下の通りである。東京の磁気学研究所にボルネオ支所ができ、所長と主任木曾礼二郎が残り、石井みち子と村尾健治が行くことになった。以降、物語は東京の木曾とボルネオのみち子・村尾との手紙のやり取りからなる。村尾が研究に熱中するあまり徐々に狂い出し、原子構造内には「極小世界」があり、一方で人間の太陽系を原子構造とする「極大世界」があると妄想を抱く。さらに村尾は水銀換金を目的とした「原子爆撃による元素の変換」を試みるが、同様に「極大世界」が人間の世界に対して陽子による「宇宙爆撃」をする可能性を恐れ、地球が破壊される前に「地球自爆」の方法を考えるようになる。村尾から「ケッコウシマス」との電報が来て木曾は驚くが、「ケッコウシマス」の誤りであった。近くに駐屯していたみち子の兄僚一の勧めで、村尾とみち子は結婚するのだ。

本章では、村尾のマッドサイエンスの二つの面とそれらの科学的背景を論じる。第一に、原子構造の観察に端を発するフラクタル的な宇宙の構造である。村尾によれば原子とは「一つの中心の核のまわ

---

<sup>2</sup>以下、「宇宙爆撃」本文の引用は、同書に拠る。

りを幾つかの高速度の電子がぐるぐる廻っているもの」で、この構造は「太陽という一つの核を持ち、水星、金星、地球、火星、木星、土星、それから天王星、海王星」という太陽系と似ている。また「大きさというものが一体どんなものか、甚だあやしい」「大きさは絶対ではありません、いつも相対的な仮りのものです」と村尾は物質の大きさを相対的に認識していた。それならば、実は人間の生きる太陽系が「より大きな世界」の中の原子であって、同様に人間が認識する原子の中にもより小さな世界があり「電子の三番目の奴には、地球という名前がつけられていて、人間という超微生物が充満している」可能性がある」と村尾は妄想する。

第二は、水銀換金の技術である。「サイクロトロン」の強力磁場を利用する爆撃によって、電子を核からもぎ離し、水銀から一つの電子を斥け、金に変換する。村尾は水銀換金のために「極小世界」に対して自らがこの「原子爆撃」をしていることから、「極大世界」が人間の住む地球という一つの電子に、同様の「爆撃」をしてくる不安を感じる。その証拠が磁気嵐や彗星といった現象であるという。それならば「巨人」に人間の存在を知らせるため、「巨人」の「宇宙爆撃」に対して「地球自爆」を遂行すべきとの考えに村尾は至る。以上が村尾のマッドサイエンスのあらましである。

この村尾の発想には、東京帝国大学教授などを歴任した磁気学研究でも知られる物理学者長岡半太郎の業績が背景にある。長岡は一九〇四年、中央にある正電荷を帯びた原子核の周りを、負電荷を帯びた電子が回る原子モデルを提唱し(Nagaoka 1904)、これは以降の原子モデルの原型となった。そして、長岡自身が原子構造について、「謂はゞ一つの世界であります世界と申しますと地球一つより尚複雑なもの……まア一つの太陽系に似たものであると考へて居ります」と言い(長岡 1924)、「この模型は惑星型原子模型と言はれ、丁度諸惑星が太陽を中心として廻転してある様に、陽電気を帯びた原子核を中心として陰電気を帯びた電子がその周囲を廻転してあるのである」(科学知識普及会編 1938:12)とあるように、長岡による原子モデルは太陽系に擬えて説明され、その概念は後に一般的科学知識として普及していた。この長岡による原子モデルと太陽系の比喩が、村尾の宇宙観の背景にあると考えられる。

さらに長岡はこの原子構造の発見を踏まえた上で、二四年九月に水銀換金実験を成功したと主張し、「顕微鏡下の水銀に燦爛たる純金の粒／歎喜に慄えて居る長岡博士昨日理研で結果を発表した」

（『時事新報』1924）、「学者と世間—長岡博士の発明に就て—」（『朝日新聞』1924）など、ジャーナリズムの注目を浴びた。原子番号八〇である水銀から「核を攪乱して」陽子を「追い出す」ことで「七十九番の金が得られる」（『時事新報』1924）とする実験である。この水銀換金実験が、「水銀の八十個の惑星から一個を叩き出してしまえば、七十九個の惑星を持った金というものが得られる」とする村尾の「原子爆撃」の背景にあると考えられる。加えて、水銀換金実験への「一時水銀中毒を伝えられたほどの精進ぶり」で「日露戦争も知らない」と云はれたほど熱中した当時の原子構造の研究（佐々木弘雄 1935：197）という尋常でない熱中ぶりや、水銀換金が「可能性証明を以てこの種の実験を打ちきり」（堀川豊永編 1942：292）と実現に至らなかった点も、村尾の研究における狂熱と現実からの乖離を想起させる。

## 2. 極小国と植民地世界

本章では、村尾の妄想における「極小世界」を戦時中の植民地との関わりから論じる。村尾は、「極小世界」即ち「彼等の住む地球である電子」が、自らの水銀換金実験によって「爆撃」の危機に晒されていると妄想する。

彼等は、そんなこととは夢にも知らず、研究し、生活し、恋愛し、闘争し、飽食し、そして又科学は吾等の手にあると誇示しているかも知れないのです、しかしながら、僕たちにとってはそのようなことはどうでもいいことです、意に介さぬことであります、水銀の八十個の惑星から一個を叩き出してしまえば、七十九個の惑星を持った金というものが得られるのです、叩き出した一個の惑星が何処に行こうとも、又その惑星の上に生活している生物がいようとも、そんなことは知ったことでないし、又現在は知るすべもありません（本文二七四頁）。

「僕たち」の生きる世界がより小さな世界に対して、世界の大きさの相違による圧倒的な力の優劣を背景に、暴力的に介入することで経済的な利益を得る。その小さな世界は、相対的な大きさの差異を除けば人間世界と同じで、住民には「研究し、生活し、恋愛し、闘争し、飽食し」という日常がある。しかし「僕たち」にとって彼ら

の生活は重要ではない。このような人間世界と「極小世界」の関係は、帝国主義下の帝国と植民地の関係の暗喩と捉えられよう。

帝国とは、ある国家がべつの政治的・社会的実質的な政治主権を牛耳るような、公式あるいは非公式の関係のことである。それは強制、政治的協力、経済的・社会的・文化的依存によって達成される（サイド 2006 : 41）

とマイケル・ドイルが定義するように、帝国主義は帝国が植民地に対して軍事的な優劣関係を背景に、強制的に主権を掌握・行使し、経済的な搾取を伴う関係にある。このような帝国主義は一八八〇年頃から波及し、「ヨーロッパとアメリカ大陸を除く世界の大半が、一握りの国々のうちのいずれかの公式の統治もしくは非公式な政治的支配の下に置かれる領土として、正式に分割された」（ホブズボーム 1993 : 80-81）。日本もこの趨勢に参入し日清戦争では台湾を、日露戦争では樺太南部を領有し、一九一〇年には韓国を併合、一九三二年には満州国を建国した。さらに四〇年には東南アジアへ侵略を開始した。

この論点について本作で注目すべきは、村尾が狂気に陥る場所が東京の磁気学研究所のボルネオ支所であるということだ。一九四〇年七月に第二次近衛文麿内閣は東南アジア地域を含む「大東亜共栄圏」の確立を国策として明示し、資源獲得のため武力による南進政策を打ち出した。イギリスとオランダの植民地であったボルネオはこの南進政策の範疇にあり、一九四一年一二月に日本軍が侵略を開始し占領、皇民化教育を推進した。「電子の中の男」の発表年および本作において当地が占有され支所が新設されていることに鑑みると、ボルネオが新しい占領地となったこの時期に本作は執筆されたと思われる。ここで研究所の人物たちにおける、東京とボルネオに対する認識を整理してみる。物語の発端は、新設のボルネオ支所への人事異動の発表であった。所長は助手の木曾に残る理由を次のように説明する。

——支所はあくまでも支所だ、一応精鋭をすぐって行くことは当然だけれど、しかしだからといって全部行ってしまつては困る、昭南島がいかにも便利だとはいっても東京をそこに移すわけにはいかんようにね、東京は地理的には少し遠くはあつても、矢張りこ

ここで大東亜に号令すべきところだからね（本文二六二頁・傍線は引用者による・以下同）。

所長は、東京と昭南島の間到大東亜帝国の中枢と占領地という歴とした序列関係を認識している。また、木曾はボルネオ行きの決まった村尾に当地を、未だ西欧化されない「世界の暗黒島」だから、「取りのこされていたボルネオに先ず東亜文化の一燈をつける」ためだと説明する。ここには日本からボルネオへの啓蒙意識に仮託した、大東亜帝国による植民地化の正当化志向が現れている。以上のように、東京に残る所長と木曾には、帝都東京を中心とした大東亜帝国の版図拡大の意志と、辺境の地「暗黒島」ボルネオを啓蒙し支配下に置く、序列意識がみられる。

ではボルネオ支所に移った村尾とみち子の認識はどうか。二人による木曾宛ての手紙から確認していこう。みち子は「四月と十月の季節風交替期のほかは雨も少く健康地だといわれましたけれど、ほんとうに、こんなに住みよい所とは思いませんでした」とボルネオが「住みよい所」であることを実感している。村尾の場合はより顕著で、

僕は内地が世界第一の風光明媚といわれていたことに少々疑問を持って来ました、（中略）とにかく僕は内地を出れば悉くが瘴癘の地であるという考えをもっていたら間違いだ、といたいのです、第一僕たちがボルネオに出発するといった時に、体に気をつけなければいかんといって、おそろしい不健康地に行くように思っていた友人もいますが、それは結局英国なんかの宣伝に乗っているんです（本文二六八頁）、

とボルネオがむしろ東京よりも「健康地」であることを強調している。さらにみち子によれば、

その村尾さんの気焔と申せば東京の夏のように湿度の高いところで、ちゃんと洋服を着てネクタイをしているなんて馬鹿気た話だ、ここは東京ほど暑いと感じないのに開襟シャツに半ズボンで何処でもとおるんだからね、などといっています。（本文二七一頁）

と村尾は、ボルネオの気候の良さだけでなく、気候に関する東京の習慣を「馬鹿気た」とまで批判している。こうした内地への批判はさすがに過激な物言いであったか、発表に至った「電子の中の男」では「東京の夏に比べたら却ってこの方がしのぎがよいぜ」「こんなに住みいいところだとは思っていませんでした」というほどで、トーンを穏やかに抑えている。また、「電子の中の男」と異なり、本作は書簡の往復という形式のプロットを採用することで、東京にいる所長と木曾、ボルネオにいる村尾と彼を代弁するみち子、それぞれの立場を対照的に描いたといえる。

こうしたボルネオへの好意的な評価と東京への批判が赴任直後に綴られ、村尾は研究の「準備が整い、ぽつぽつ実験に取りかか」る。そして「原子爆撃による元素の変換」に着手し、原子の研究に触れるにつれ、「大きさというものが一体どんなものか、甚だあやしいものである」という発想から、原子の中に太陽系があるのではないかというマッドサイエンスに急速に傾倒してゆく。つまり村尾のマッドサイエンスを支える相対的な認識は、原子研究に先立って、すでに世界の気候風土の比較においてみられるのだ。村尾は内地が「第一の健康地であるかどうか」に疑問を抱いた後に、続けて言う。

地球の自転の方向からいって、亜欧大陸、米洲大陸など大陸の西側が健康地である筈です、内地やニューヨークなど大陸の東側に在るものは、それよりも劣るとも優ってはいないでしょう、とい  
って何も絶対的ではありませんけど……、（中略）ボルネオは健康地です、つくづくそうわかりました、猛獣毒蛇もいません、鱧は少しいます、しかし東京にだって蛇はいるのですから、愕くに  
あたりません（本文二六八頁）。

村尾は内地が「第一の」健康地ではなかったという確信から、世界各地の気候やボルネオと東京の野生生物の生態の比較に対する、相対的な認識を手に入れている。そして、帝国の中枢東京と「暗黒島」ボルネオの優劣が、少なくとも気候風土においては相対的な関係であって、あるいはボルネオが優位にある点もある、という内地の所長や木曾にはない認識に村尾は至った。この気候風土をめぐる帝国と植民地に関する相対的な認識が、村尾の原子構造をめぐる相対的な「極小世界」「極大世界」の存在という発想の前に配置されている。それならば、村尾の想定する、「極小世界」に相対的な力



の優劣を背景に暴力的に介入し経済的な利益を得る人間世界と、相対的な大きさの相違を除けば人間世界と同じで、日常生活がある「極小世界」とは、戦時下における帝国日本と植民地・占領地の暗示として捉えられるのではないか。

### 3. 極大世界と西欧世界

さらに村尾は、「極小世界」の対極に位置する、人間の住む地球と太陽系を一つの電子と原子とする、より大きな「極大世界」を妄想する。「けれどもこれは僕たちの実験室の中にある実験材料の中の原子の話、しかしこれと同様なことが、この、現に僕たちが生活している太陽系の地球についても、いえぬことでしょうか」と言う。村尾が「極小世界」に水銀換金のため「原子爆撃」を試みて一電子をなす惑星を破壊するように、「極大世界」の「超大巨人」が彼らの世界における一電子である人間世界の地球を、同様の実験のために破壊してしまうかもしれない。地球人はこの危機を知らず「笑い、怒り、歌っている」が、村尾は「何か総毛立つような恐怖を感じずにはいられ」ない。

超大巨人の宇宙爆撃によって、この地球がむざむざと宇宙の外に叩き出され、むなしく崩壊することは、とても坐視するに忍び難い思いです、地球文明が飛散する前に、なんとかして超大巨人に、彼等にとってはただの電子でしかない地球の上に、このような科学文化があったことを知らしめたいのです、それには、唯一つの方法しかありません。つまり地球人自ら地球を爆砕するのです（本文二七六頁）。

「地球自爆」というせめてもの抵抗によって、電子の減少による元素の自然変換が行われ、「超大巨人」は爆砕した地球の存在に気づくであろう。この自爆は「原子破壊のエネルギー」によって遂行可能である。

さて前章にて論じたように人間世界と「極小世界」とを帝国日本と植民地の暗喩と捉えられるならば、「極大世界」と人間世界は欧米列強と帝国日本の暗喩として考えるべきだろう。植民地に対して日本は当時軍事的・経済的に優位にあったわけだが、西欧諸国に対しては劣位にあった。第二次世界大戦は連合国からすればファシズム諸国に対抗し民主主義を守り抜く反ファシズム戦争であったのに対

し、枢軸国からすれば英仏蘭など植民地・占領地を広く所有する「持てる国」に対し「持たざる国」が領土再分割を求める帝国主義戦争という性質を帯びていた(油井 2005: 241-242)。「米國及英國ニ對スル宣戰ノ詔書」に「經濟上軍事上ノ脅威ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ爲蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ」(大蔵省印刷局編 1941)とあるように、太平洋戦争開戦の理由は米英による経済上・軍事上の脅威の増大に対する日本の「存立」の危機感と表明されていた。つまり、自らよりも優位な世界が自らの世界を脅かすために先手を打って攻撃を仕掛けたとされていたのだ。この先制攻撃である一九四一年一月八日の真珠湾攻撃においてすでに、後に神風特別攻撃隊により広く知られる所謂「特攻」、必死の「特別攻撃隊」が特殊潜航艇によって編成され、戦死した隊員九名は「軍神」として崇められている(『東京日日新聞』1942)。捨て身の先制攻撃によって強大な世界に小世界の存在を知らしめる、その行為は村尾が妄想した狂気の「地球自爆」と、思想と方法において通じている。

以上のように、本作における「極大世界」一人間世界一「極小世界」という謂わばフラクタルな世界観は、執筆時の太平洋戦争下における、西欧ー日本ー日本の植民地という序列構造的な世界観を暗示するものであった。そもそも、近代日本が西欧に対しては「小国」、東・東南アジア諸国に対しては「大国」と自らを認識してきたことについては、伊達聖伸(2021: 45-65)の指摘がある。伊達によれば、日本は明治期以降の近代化の過程において「西洋列強に対して「小国」であるという意識を持ちながら、国内的には、またアジアの近隣諸国に対しては「大国」として振る舞う態度を身につけ、とりわけ日清・日露戦争以降は西洋に対しても「大国」として渡り合おうとする傾向を強めた」が、それは「小国意識」の「劣等感の裏返し」であったという。日本が「「小国」意識と「大国」意識のあいだを揺れ動」いてきたとする。この指摘を踏まえるならば、本作における世界構造は、第二次世界対戦時に頂点に達する、日本が認識していた三層構造の世界観における、植民地侵略の認識と、より強大な帝国との帝国主義戦争との認識という二重の意識の反映と言えるのではないか。

#### 4. 帝国主義批判としてのマッドサイエンス

みち子が悪戯で水銀の一粒を仁丹に置き換えて金槌で粉碎したために、村尾は実験室の水銀が変質したと思ひ込む。村尾はこれを電子世界に住む者たちの自爆と捉える。そして「地球自爆」の敢行を決意するが、同時に村尾は痛惜の念をも綴る。

声と文字以外の感応の方法によって、生物間の意志が疎通出来る方法が見つけられてあったならば、或いは僕の爆撃しようとしている電子上の極小人間、又、我々の地球を爆撃しようとしている超大巨人と、互いに了解し合うことが出来たかも知れませんが、それは最早、今の中に合わぬことになってしまいました（本文二七九頁）。

ことばによらない「感応」の力による、極小人間や超大巨人との意思疎通の可能性。この村尾の思考はこう捉えられよう。ことばすなわち「音と文字」、これを現実世界に即して考えるならば、各国各民族が用いる諸言語である。言語の異なる諸国家諸民族、西欧・日本・植民地等が、その差異を乗り越えて意思を疎通し、理解し合うことが本来できたかもしれない。しかし、「今」現在の、覇権を争う帝国主義の世界において他国・他民族の意向を一つ一つ聞いていては自国存立が危ういことは自明だ。そうして世界は太平洋戦争へ突入し、もはや「心と心、魂と魂とが交流」することは不可能なのである、と。

#### おわりに

本作は、同時代の西欧の連合国という日本にとっての強大国との「自存自衛」のための争い、小国を植民地化・占領地化するというアジア・太平洋の二面的性格を、「極大世界」・人間の世界・「極小世界」として寓意化し、本来互いに持続可能であったかもしれない世界間の関係が崩壊する、狂った物語として表現した。マッドサイエンスの表現を通じて、同時代の太平洋戦争の勃発を世界の狂いとして批評してみせたのだ。

紙幅の都合で論じられなかったが、探偵小説におけるマッドサイエントイスト表象、戦中における科学とナショナリズムといった点に

については未だ展開の余地がある。こうした面からの更なる考察が必要である。

## 参考文献

『朝日新聞』1924. 「学者と世間—長岡博士の発明に就て—」1924年9月28日.

板倉聖宣, 木村東作, 八木江里 . 『長岡半太郎伝』. 東京都: 朝日新聞社.

大蔵省印刷局編 1941. 『官報』号外 1941年12月8日. 東京都: 日本マイクロ写真.

科学知識普及会編 1938. 『最新図解科学精粹』. 東京都: 科学知識普及会.

榎田萬治 1975. 『日本探偵作家論』. 東京都: 幻影城

榎田萬治, 新保博久監修 2000. 『日本ミステリー事典』. 東京都: 新潮社.

E・W・サイード 2006. 『文化と帝国主義 1』. 大橋洋一訳. 東京都: みすず書房.

佐々木弘雄 1935. 『続人物春秋』. 東京都: 改造社.

『時事新報』1924. 「顕微鏡下の水銀に燦爛たる純金の粒」. 1924年9月21日.

新保博久, 山前讓監修 2003–2006. 『江戸川乱歩全集』全30巻. 東京都: 光文社.

伊達聖伸 2021. 「『小国』論試論—近現代日本の『宗教』と『世俗』の観点から普遍を求めて—」. 『東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要』25:45–65.

『東京日日新聞』1942. 「不滅の偉勳・天聴に達す」 7 March 1942.

Nagaoka, Hantaro 1904. “On the kinetics of a system of particles illustrating the line and the band spectrum and the phenomena of radioactivity”. *Philosophical Magazine* 6 (7): 445–455.

長岡半太郎 1924. 「原子に就て」. 『工業之大日本』21(4):6–11.

長山靖生 2018. 『日本SF精神史 完全版』. 東京都：河出書房新社.

E・J・ホブズボーム 1993. 『帝国の時代 1875–1914 1』. 野口武彦, 野口照子訳. 東京都：みすず書房.

堀川豊永編 1942. 『近代日本の科学者 第三巻』. 東京都：人文閣.

油井大三郎 2005. 「世界戦争の中のアジア・太平洋戦争」. 倉沢愛子, 杉原達, 成田龍一, テッサ・モーリス・スズキ, 油井大三郎, 吉田裕編. 『岩波講座アジア・太平洋戦争1』. 東京都：岩波書店.

横井司 2013. 「解題」. 『蘭郁二郎探偵小説選II』. 東京都：論創社. 356.

蘭郁二郎 1993. 「宇宙爆撃」. 『火星の魔術師』. 東京都：国書刊行会. 256–283.

蘭郁二郎 2013. 『蘭郁二郎探偵小説選 I、II』. 東京都：論創社.